

〔第1事件〕2006年（ワ）第6484号謝罪及び損害賠償請求事件・原告王子雄外39名
〔第2事件〕2008年（ワ）第18382号謝罪及び損害賠償請求事件・原告呉及義外21名
〔第3事件〕2008年（ワ）第35183号謝罪及び損害賠償請求事件・原告劉国珍外44名
〔第4事件〕2009年（ワ）第35262号謝罪及び損害賠償請求事件・原告夏振東外80名

意見陳述書

2010年12月6日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国重慶市巴南区界石鎮武新村獅子口居民組25号
重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 盧賢柏

1 はじめに

私は重慶爆撃被害者の盧賢柏と申します。1935年7月23日生まれで現在75歳です。

私は、1939年5月4日の日本軍による無差別爆撃で、愛する父を殺され、同時に、店舗を兼ねた自宅を破壊されて財産全てを失いました【父は添付写真①を参照】。

現在、重慶市巴南区界石鎮武新村に住んでいます。界石鎮武新村は、重慶の中心街まで、現在でも自動車で1時間半ほど、バスでは2時間ほどかかるところにあります【「界石鎮」は別紙1の地図参照】。

私は、重慶爆撃の対日民間賠償請求原告団の一人ですが、重慶爆撃被害者を支援する自主的な運動の3人の共同代表の一人を務めています。

私は、子供の頃から、日本軍による重慶爆撃のことや我が家が受けた爆撃による被害のことを母から聞き、また親戚や父の仕事仲間の人達からも聞いて育ってきました。その母も1978年に亡くなりましたので、私は、母に代わって我が盧家を代表し、我が家に災難をもたらした日本軍の犯罪行為を告発します。また日本軍が無差別爆撃によって何万人という重慶市民を殺傷した犯罪行為について告発します。

2、爆撃前の我が家

父が爆撃で死亡する直前の私の家は、父盧漢全（1894年4月6日生まれ当

時 45 歳)と母劉安珍(1905 年 1 月 18 日生まれ当時 34 歳)を中心に、子供が 5 人いました。父と母は、ともに重慶郊外の田舎、現在の重慶市巴南区界石鎮武新村(当時は界石郷大田村)の出身でした【「大田村」は別紙 1 の地図参照、母の戦後の様子は添付写真②参照】。

私の両親は、周囲の誰もが認める大変仲のいい夫婦でしたが、その二人がもうけた子供は、長女盧榮琴(当時 14 歳)、次女盧賢淑(当時 11 歳)、長男盧榮松(当時 7 歳)、次男の私(当時 3 歳 8 ヶ月)、三女盧賢恵(当時生後 2 ヶ月)の 5 人でした。

父は、1926 年から、家族の生活のために重慶の中心街で働くようになりました。父が始めた仕事は、竹を使って棚を作り家の修繕をしたり、家を建てる際に使う足場を竹で組立てるなどの建築関係の仕事です。

その後、1930 年過ぎ頃になって、父は、同業者で大変親しい大先輩の方が持っていた黄桷街・江家巷の 2 階建ての建物を購入し、そこを店舗兼自宅としました【「黄桷街・江家巷」は別紙 2、3 の地図参照】。

同時に、父は、程宗義、胡国全、朱紹雲らと私の叔父(父の弟)盧仁富を雇い、また同じ大田村の艾樹榮や、長寿県の梁正安と梁正南の三人を弟子にして一緒に事業を大きくしていきました。

こうして我が家の仕事は徐々に繁盛するようになり、収入も増えていき、1939 年 5 月の爆撃の前、我が家は経済的にはかなりゆとりのある生活を送り、家庭の上でも子供に恵まれた幸福な毎日を送っていました。

3、我が家の重慶爆撃による被害

私の父は、1939 年 5 月 4 日、世界を驚愕させた日本軍の“五・三、五・四”爆撃攻撃によって殺されました。

前日の 5 月 3 日にも日本軍は重慶に無差別爆撃を加えて、多くの重慶市民が虐殺されました。5 月 4 日、父は、防空警報を聞いて、店の従業員(程宗義、胡国全、艾樹榮、何金英ら)と一緒に店のあった黄桷街・江家巷に近い千斯門の防空洞に避難しました【「千斯門」は別紙 2 の地図参照】。

しかし防空洞に入ってから一時間以上経っても日本の飛行機の音が聞こえなかったので、父は店に戻り帳簿とお金を取りに行くと言い出しました。店の従業員や弟子たちは、“防空警報がまだ解除されていないので絶対ではいけないよ!”と言って父を止めようとしてしました。しかし父は“昨日(1939 年 5 月 3 日)既に大規模な爆撃を行ったから今日は日本の飛行機はこないよ。”と言い、店に戻りました。しかし、その後、不幸にも、父は日本軍の爆撃に遭遇し、自分の店の隣の建物の下敷きとなって死亡し

ました【父の死亡地点は別紙 3 の地図及び添付写真⑥参照】。

一方、母は、日本軍が“五・三、五・四”の爆撃を重慶に加えていた頃、私たち 5 人の子供たちと一緒に田舎にいました。5 月 3 日の日本軍の重慶爆撃で多数の重慶市民が亡くなりました。母は、その 5 月 3 日の爆撃の悲報を伝え聞き、父の安否が心配になり、叔父と一緒に父を捜しに重慶に向かいました。

母と叔父は、徒歩で 5、6 時間かけて 5 月 4 日の夕方に重慶の十八梯付近に辿り着きましたが、防空警報が鳴ったので近くの十八梯の防空洞に避難しました。その後、防空警報が解除されてから母が防空洞から外に出てみると、家々が燃える火が見え、またたくさんの爆撃で殺された市民の遺体を目撃しました。

母は父の安否が一層心配になり、父の店があった黄桷街・江家巷の方角に必死に歩きました。黄桷街・江家巷までの間の道路には死体があちこちに転がり、人々の泣き声や悲鳴が途絶えることなく聞こえてきました。まさに地獄のような有様でした。

母と叔父がようやく父の店にたどり着いた時、すでに店とその周辺は瓦礫の山の状態で、父の姿はどこにも見えませんでした。店の従業員と弟子たちも店の周辺を母らと一緒に必死に父を探してくれました。しかし、4 日は夜で周囲が暗くなっていたので父を捜し出すことはできませんでした。

翌 5 日の朝、母と店の従業員や弟子たちは、再び店の周辺で父を捜しました。間もなく父の弟子の一人の梁正安が、瓦礫の山の中から、黒く焦げた 1 つの遺体を発見し、母に知らせました。

母らはその遺体を瓦礫の山から取り出してみると、遺体が身につけていた衣服と衣服の中にあった写真から父の遺体であることが分かりました。母はその場で泣き崩れました。

その後、叔父と同僚たちが父の遺体を大田村に運んでくれましたので、父を田舎に埋葬することができました。

4、爆撃後の生活

(1) 父が亡くなったとき、私の母は 34 歳でした。母はすごく優しい人で、封建社会の風習の纏足をしており、普通の家庭主婦でした。子供たちは爆撃当時、みんな幼い年でした。特に私は 3 歳 8 ヶ月でしたし、妹はわずか 2 ヶ月でした。ですから、母は、父死亡後に残された 5 人の子供を養うために大変苦労しました。

我が家の生活費はだんだんと底を尽くようになり、母は、父が亡くなってから2年後、生活の為に仕方なく自分がいつも大事にしていた衣服と、田舎の実家にあった財産を売りました。しかし、それでも私たちは極度の生活苦を強いられ続けました。

(2) 我が家の生活苦の最大の犠牲者は一番年下の妹でした。妹は2歳になったとき、満足な食事をとることができなかったために、体力が弱まり病気がちになり、不運にも冬場に風邪をこじらせた状態になり、だんだんと食べ物を受け付けなくなり、最後は栄養失調状態になって死んでしまいました。

妹はまだ2歳で、ちゃんとした会話はできませんでしたが、私を見ると何時もにこにこ笑いながら“小さい兄さん”と呼んでくれました。その妹の声や笑顔は今も忘れられません。妹のことを考えると今でも涙が出ます。

妹が死んだとき、私は、次に病気で体力を失って死亡するのは私だと覚悟しました。それほど私にとって妹の死はショックでした。母も大きな打撃を受けていました。

(3) 母は、妹が栄養失調で死んだため、残った4人の子供たちと一緒に養うのは無理だとあきらめて、家族がばらばらになっても生き残れる道を探しました。まもなく母は長女を嫁に出しました。また次女は母が見つけた重慶のある家の使用人として働くことになりました。男の私と兄は、叔父（母の弟）の家の世話になることになりました。

他方、母自身も、自分自身と子供たちの生活費を稼ぐために、重慶で働くことを決意しました。母は、人の家の洗濯物を洗ったり、家事を手伝ったりするなど、慣れない仕事を引き受けて必死に働きました。

(4) しかし、私と兄が世話になった叔父の家も生活が苦しく、新しく2人の食べ盛りの子供を家族にいらして生活するのは無理でした。しばらく経ってから兄は仕方なく、私のもう一人の叔父（父の弟）の家に移らざるを得ませんでした。

私は、一人で叔父の家に残り、寂しい生活を送りました。学校に入る前の7歳ごろから叔父の家で牛飼いや水を汲む仕事、焚き木を拾うなどの仕事をやりました。

(5) 私は、7歳になり、叔父の家があった界石郷武学村で小学校に通うようになりました。その後、8歳から12歳までは界石郷中心小学校で勉強するようになりました【「武学村」は別紙1の地図参照】。

しかし、叔父の家も貧しかったので、食事は毎日朝と夜の2食だけで、

昼は食べることができませんでした。私はいつも他の子供たちがご飯を楽しく食べるのを羨ましく見つめるしかありませんでした。

また、小学校に通っていた頃は、ずっと靴を買うことができませんでした。私は、雨の日にも、仕事をするときも、学校に通うときも素足でした。ですから夏には石畳の道が熱く、冬は足が凍る様な寒さに苦勞をしました。

こうして私は母の仕送りで学校は通えたものの、小学校に通っていた間は靴をはくこともできず、服装も穴だらけのぼろぼろの服を着ており、乞食同様の生活をおくりました。また、昼は飢餓と闘い、夜は家の仕事で毎日大変でした。

(6) このようにして父が亡くなった後の私たち一家は、離れ離れになり、きびしい生活難にさらされ、それぞれ必死の思いで生活してきました。この我が家の苦難は、全て日本軍の残虐な無差別爆撃で父を殺され、財産を奪われたたえに引き起こされたものです。

その後、私は、12歳の時に5年間の叔父の家での生活を終えて、重慶にあった叔父（父の弟盧仁富）の家に行き、1950年まで重慶で叔父の家で兄と一緒に父と同じように家族のために建築業の仕事をやりました。

母は私たち兄弟が生活できる仕事についてたのを見て田舎に帰りました。1949年に中国人民解放軍と国民党軍との戦闘が激しくなると、母は再び重慶市内で災難が起こるのではないかと心配して私に田舎に帰ってくるように何度も何度も言いました。私は、これ以上母を心配させてはいけないと思い、1950年の暮れに故郷の界石郷武学村に戻りました。

(7) その後、私は、1955年から、武学村の行政の仕事を担当するようになりました。1963年から2001年までの約40年間、私は、武学村の役場の責任者を務めてきました【武学村での私の仕事の様子は添付写真④、⑤参照】。

このように私は新中国になってから村のために同僚と力を合わせて懸命に仕事をしてきました。

また私と兄及び2人の姉は、それぞれ結婚をして家庭をもち、子供にも恵まれ、平穏な生活を送ってきました【戦後の私と兄弟及びそれぞれの家族の様子は添付写真②、③参照】。

一方、母は1978年に73歳で亡くなりました。田舎に戻ってからの母の生活は比較的穏やかなものでしたが、父を奪われ一人身となった寂しさが母を苦しめていたことは間違いありません。私たち子供は、母が長く味わってきた悲しみや寂しさを死を看取るまで慰めることができなかったこ

とを心底から残念に思い、悔やんでいます。

5、日本政府に対する要求

日本軍国主義と日本軍は、日本の天皇の命令に従い、1938年から1943年までの5年半にも及ぶ長い期間、重慶に対し空から無差別爆撃を加えました。重慶爆撃は人類史上前例のない残虐な爆撃であり、多数の重慶市民を殺傷し、家屋・財産をことごとく破壊し、大惨事を引き起こしました。

私は、重慶爆撃の被害者の遺族であり、自分自身も被害者です。

裁判官に対して、また日本の政府と国民に対して、私の正直な思いを述べます。私は、母を死ぬまで苦しめた日本を心底憎んでいます。重慶爆撃を発動した日本軍を憎んでいます。

たしかに重慶爆撃からすでに約70年という長い時間がたちました。しかし、重慶爆撃の数多くの被害者たちは、いまでも戦争がもたらした肉体的、精神的苦痛にさらされています。

戦争の加害者である日本政府は、重慶爆撃の被害者の気持ちを一度でも考えたことがあるのでしょうか。

国会では、日本が受けた原爆や空襲の被害について質疑されたことはあっても、重慶爆撃について日本の国会議員が政府に重慶爆撃に関する事実確認や対策や責任について質問したことが一度でもあるのでしょうか。

日本の政府は、未だに重慶爆撃の被害者に謝罪すら行っていません。

私たち被害者は、ある者は幼い頃肉親を失った悲しみを心に刻み込み、またある者は一生体に障害を持って不自由な体を引きながら、身心共に戦争の傷を負ったまま様々な困難と闘いながら生きてきました。

日本政府は一刻も早く私たち重慶大爆撃の被害者に誠意のある謝罪と賠償を行うべきです。

そうしなければ、私たち無差別爆撃の被害者の日本に対する恨み、憎しみは絶対に消えことはありません。そうしなければ、中国と日本の真の友好は実現されませんし、世界の平和は実現できません。このことを日本は充分に認識すべきです。

最後に、日本の裁判官が、いま述べた私の訴えを認められるように表明して私の意見陳述を終わります。

以上

渝中区 重庆市辖区，市政府驻地。位于市境西部，长江、嘉陵江交汇处。总人口59万。区政府驻七星岗街道。地形狭长，雨量充沛。有长江上游最大的客、货运港口和重庆火车站。工业以交通机械、电子通信器材、印刷、建筑业、交通运输、邮电通讯、商贸、餐饮业、金融保险、房地产业为主。有红岩革命纪念馆曾家岩分馆、周公馆、桂园等纪念地和宗周巴将军墓、罗汉寺、清真寺等古迹。

江北区 重庆市辖区。位于市境西部。总人口47万。区政府驻华新街道。地势北高南低，有磁石、天然气、页岩等矿产资源。210(川黔)国道、渝长(寿)高速公路横贯区境。嘉陵江、长江流经境南。工业以机械、冶金、化学、造船、皮革为主。产长安奥拓汽车。农业主产蔬菜、养殖生猪、桑蚕、水产。古迹有盘溪汉代无铭阙、汉代崖墓地、徐悲鸿故居等。

南岸区 重庆市辖区。位于市境西部，长江南岸。总人口48万。区政府驻南坪南城大道。地势东南高西北低。有沿江客货码头十余个，公路主干线横贯城乡，以长江大桥、长江航空索道与渝中区相连。工业有机械、纺织、化工、电子、皮革、仪表、医药、卷烟、建材、食品、服装等门类。国家级重庆经济技术开发区位于境内。农业主产水稻、蔬菜、产生猪、鱼、水果等。南山风景区为游览胜地。

巴南区 重庆市辖区。位于市境西部。总人口86万。区政府驻鱼洞街道。地处丘陵地带。矿产资源丰富，有铁、煤、石灰石、天然气等。川黔公路穿越境内，长江上设鱼洞、木洞2港口。工业以汽车制造、机械、冶金、化学、建材、轻纺为主。是全国商品粮和瘦肉型猪基地，主产水稻、玉米、小麦。特产五布柚、木洞蜜枣、巴山银针茶、巴南香茗茶等。南温泉、南湖、姜家湾洞群、圣灯山森林公园和自然保护区(市级)为旅游胜地。

重慶の中心街

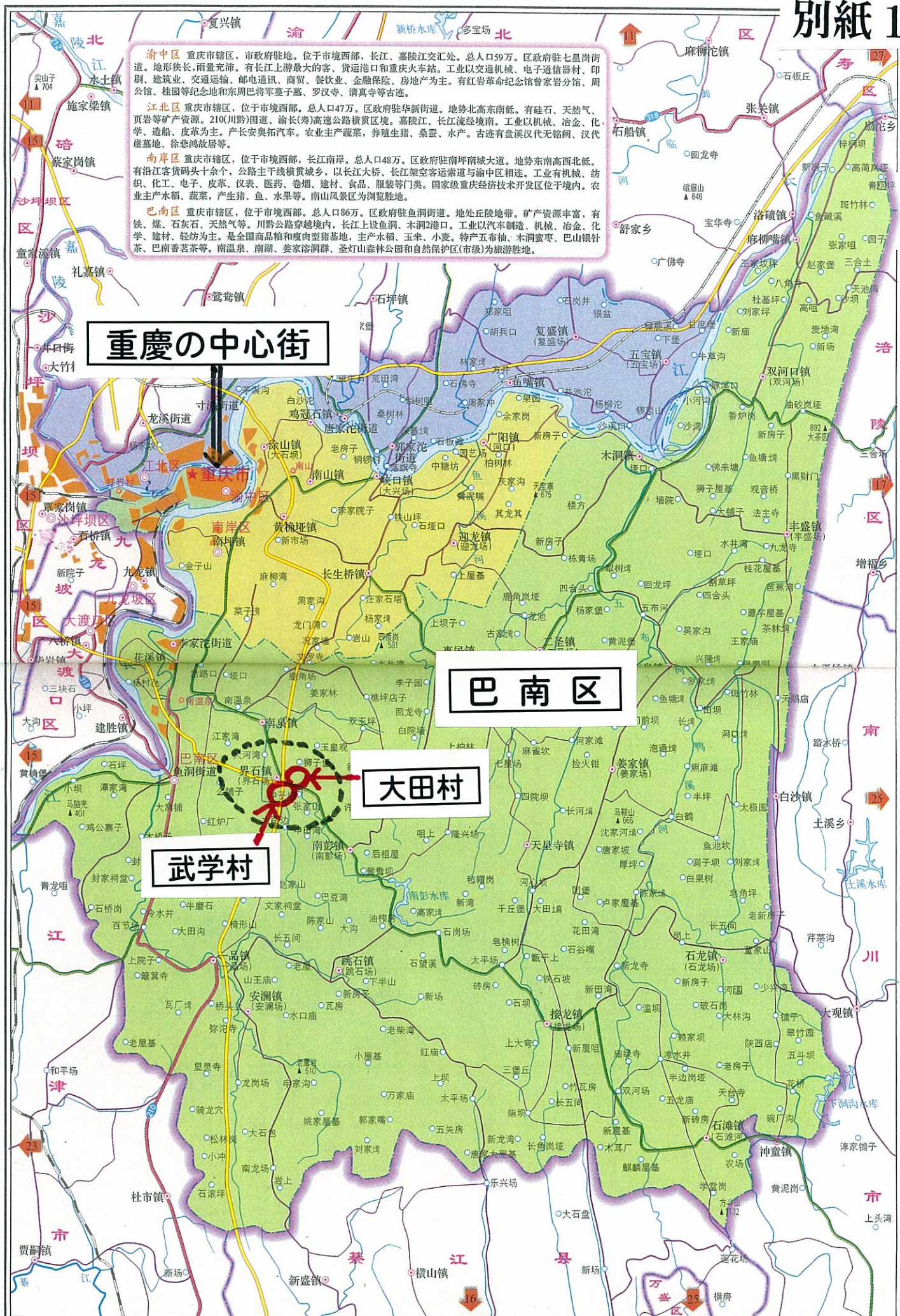
巴南区

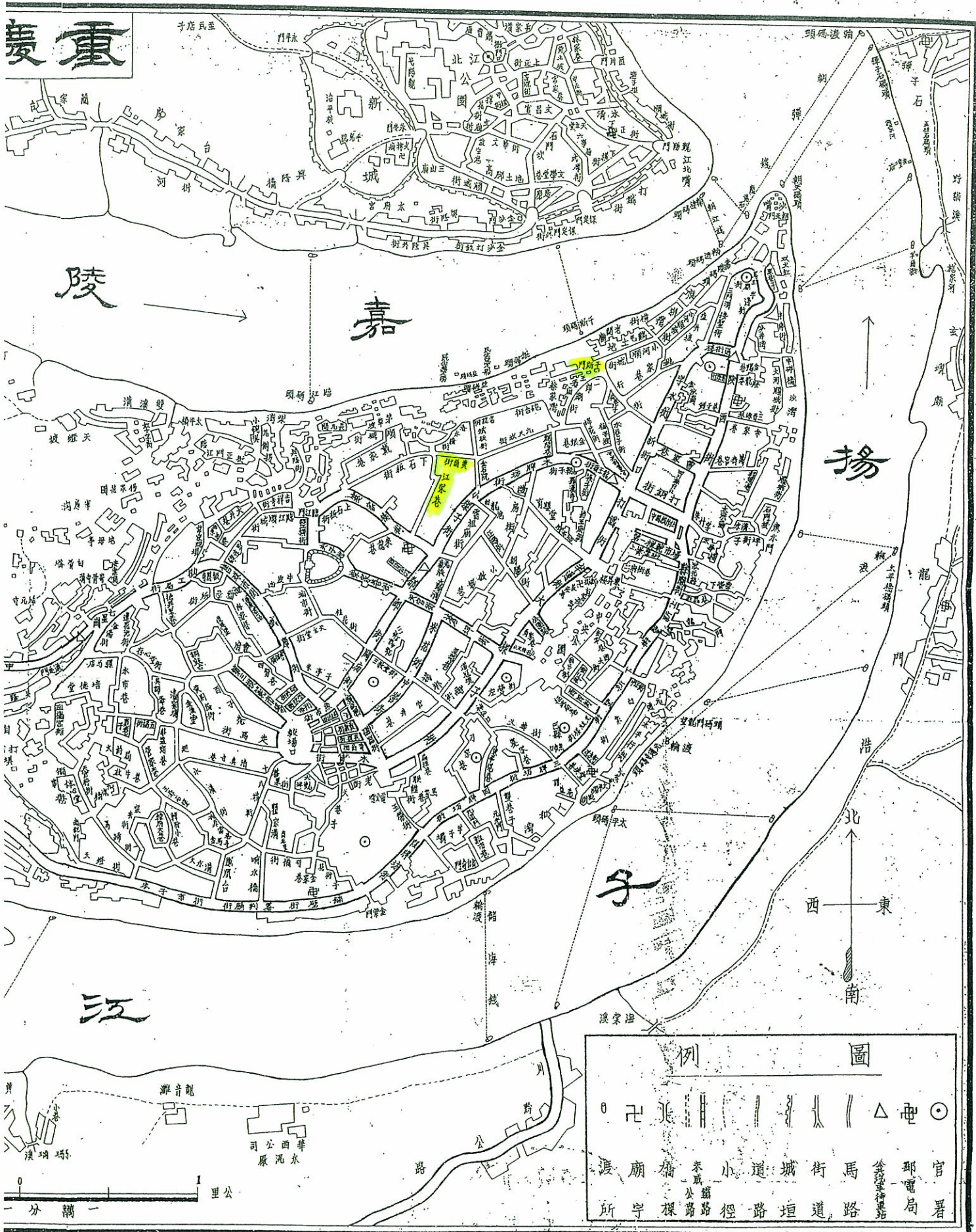
大田村

武学村

1:300 000

0 3.0 6.0 千米





写真①



私の父 廬漢全

写真②



私の家族(1968年春节)

写真③



1978年(母が亡くなったとき)

写真④

私



武学村の村民たちと私

写真⑤



武学村の役場の様子

写真⑥



父廬漢全が日本軍の爆撃で死亡した地点。指さしているのは私(2010年11月26日)